横須賀市博物館研究報告
(人文科学)
第7号　1963年3月

吉井城山貝塚の丹彩土器について

赤星直忠

横須賀市吉井城山第一貝塚上部貝層はカソリEII式・III式土器を包含する。この土器中には所謂丹塗土器がある。丹をもって文様をかいたものもあるらしい。カソリE式に丹塗土器があることは従前から知られていたことである。今回出土土器中から丹彩のものを選び、丹彩部分・土器形態の一般土器との違いについて再検討してみようとするものである。

丹彩の部分と土器の形態

丹の付着している断片は六二片ある。内外面につくもの、外面のみにつくもの、内面のみにつくものなどある。内面のみにつく土器片は一〇片あり、内六片は無文、四片は表面に縄文をつけた一般土器と同じものの如くである。丹彩土器片中四片は土器面に丹をもって文様を描いたものの一部と思われるものである。それはたて方向の櫛目文の上から丹をもって描いたらしい太い弧線の一部を残すもの二、点らしいもの一、無文部分を丹をもって塗り分けたとみられるもの一である。

丹彩土器の形態をみると壺形・浅鉢形・甕形とあり、壺形・浅鉢形が多く、甕形は特殊な小形土器であるらしい。以下各形態毎に丹彩部分をみよう。

壺形　復原(高一五cm)されたものでみると、(A)肩部に特に高い二隆線をめぐらし、二隆線間を各所で丸い橋形につなげる。胴には二重沈線をもって連続渦文を描き、渦文と渦文の間に小円を配する。口縁から頸にかけて、及び二重線で描いた渦文と円とに丹をぬる。これと同形のものの破片が別にあり、胴部に沈線文がある。この破片は全面に丹を塗っている(図版1)。(B)短かい直立した頸のつけ根、肩との間に広い鍔をめぐらし、この鍔を上下に貫く多くの小孔を持つ。胴部は縄文で埋め、又は沈線で区画した中を縄文で埋める。沈線のみで文様を構成しているも

のもある。口縁・頸部・鍔上面までを丹塗する。沈線で区画した中を縄文で埋めたものでは縄文以外の部分を丹塗にするようである。本例の完形品（図版4）が横浜市神奈川区羽沢町大道遺跡から出ている。全くの無文である。丹の保存容器として使われており、内面に多くの丹を付着していた。(C)B例と同形、鍔に貫通孔を作らず、鍔の下側に鍔と丁字状になるように耳状の隆線を作るもの。この耳状部分に横から貫通孔を作っている。胴部には沈線で文様をかき、その間を縄文で埋め、縄文以外の部分を丹塗にしている。又鍔以上を丹塗にしている。(D)壺形だが頸部が全くないもの。薄手、黒色、へらみがき。文様はみみずばれ状の隆線をもって作られる。口縁から若干離れた部分に一隆線をめぐらし、これ以下が文様部となる。胴には大きく渦文を二重隆線であらわし、文様間を丹をもって埋める。内面にまで丹をつけるものが多い。本貝塚土器中にもみみずばれ状二重隆線で文様を構成し、その中を縄文で埋めたものがあるが、このような薄手・黒色へらみがき・みみずばれ状隆線渦文はこの付近にはないから、特殊な存在である。これは丹の産地から丹の容器として移入されたものと解せられる。この仲間には口縁の外、肩上部をめぐる隆線を特に高いものとし、これから胴に向けて下る隆線の根もとに横から紐通しあなをあけるものがある。

浅鉢形　口径三四cm、高二〇cm。口縁添に広い無文帯をめぐらす。この無文帯部分は胴部より厚く作られている。無文帯の下に太い一沈線をめぐらし、その下は文様帯となる（図版3）。たて方向の櫛目文又は縄文。底は小さい平底。この口縁の広い無文帯が丹塗にされたものが多い。一九片。口縁上面から内面にかけても丹を塗っているが、口縁添の部分二cmくらいだけで、それ以下の内面に及んでいないもの四片。内面一面に付着するもの三片。他は口縁部の断欠であるからどこまで丹が付着したものか不明。

甕形　小形（高一三・五cm）の甕形。前述の壺形の胴をやせさせ丈高にしたものと考えればよい。口縁をめぐり広い無文帯があり、無文帯の下にく字形隆線が一めぐりする。くの折れ曲りから下を縄文で埋め、口縁をめぐる広い無文帯を丹塗にしている。く字形の一部が特に大きくふくれて耳状となった部分に上から紐通し穴が貫通する。紐通穴のある部分は口縁がへ字状に突起する。本例では相対する一対の口縁へ字状突起があり、従って耳も相対する二個であるから上からみると楕円形にみえる（図版2）。

以上の如く完形品はないが復原されたものから考えると、壺形と浅鉢形が多く、甕形は少ないようである。壺形のものも比較的小形のものが多いのは丹などの容器としての特別用途のものであったからであろう。稀にはかなり大形のものもあったことは厚くかなり大形のものと認められる破片の存在によって知られる。直立した短頸をもつものは肩上部をめぐる鍔状又は高い二隆線をめぐらすものがあり、その文様は一般土器と大差ないようである。頸を全く持たぬ壺形のものがあり、これはみみずばれ状隆線を文様の主要素とするものであり、多くは薄手で黒色・へらみがき

されており、一般土器とは大いに異る。浅鉢形のものはやや大形ですりばち形である。厚い口縁をもち、胴部文様は一般的である。内部に丹を付着するものが多いのは丹を油でこねるとき使った容器であろうか。甕形のものは小形であり、壺形や浅鉢形に比して少ない。文様は一般的。これらの中、壺と甕は丹の容器であったろう。土器を丹彩することは美くしい土器とすることを目的としたほかに、特に貴重容器であることを示す意図もあったであろう。貴重容器であるこれら壺や甕には口部をめぐって紐通し穴を持つものが普通であり、これに紐をからげて蓋が開くことを防いだものと考えられる。

土器丹彩の理由

彼らは土器面に文様を刻みつけるのを普通としていたが、時にはその一部に丹彩することもあったし丹で文様をかくこともあったらしい。土器文様の一部に丹彩することは文様効果をより増大する。彼らは土器をより美くしいものにするために丹彩した。彼らには彼ら相応の美意識があった。しかし丹彩土器は単に土器を美くしいものとするだけでなく、それが特別土器であることを一目でほかの土器と区別するためのみわけのためのものでもあったと考える。丹が内外に付着した土器片が多いのでみると、丹のような貴重品をいれておくのにもこの土器が選ばれたのである。恐らく丹の製造所で丹の容器として特別土器が作られたにちがいないと考える。

使用丹についての考察

本貝塚出土の丹彩土器には内面にも外面にも相当よく丹が残っている。比較的厚く丹がついていて、こすると剝落する。多数採集された土錘の中には丹彩土器片が使われているのもある。一例は外面に丹が残るだけだが、一例は内外面に相当よく丹が残っている。今でこそ指でこすると丹がおちるが、土錘のように手荒に使用されたと思われるものについていた丹が比較的よく残っているということは土器破片の周をけずって土錘に作ったり、紐でしばって日常使ったりしたにもかかわらず、当時はそれほど手に付着したり、はげおちたりしないほどに丹がよく固着していたものと考えなくてはならない。粉状の丹を顔料として使うには水でこねても使えるが、乾くと落ちてしまうから、膠とか油とかを混ぜなければならない。膠をまぜたものだと水にひたしたり、乾かしたりするような土錘についていた丹はおちてしまうはずであるのに、それがおちなかったということは、丹が油性のものでねってあったためだとすることができる。油性のものでねってあるのは乾くと固着する。当時植物性油を油の形でと

り出すことができたかどうかわからないが、動物性の脂は容易にとることができたと思われる。彼らは魚やシカやイノシシを捕えることができた。それらを煮てもあぶっても油はとれる。しかし彼らは土器を火にかけて湯をわかし、その中に魚や獣肉を入れて油脂をとかしとるということをしたかどうか。むしろ彼らは日常生活中獣肉を火にあぶっていたとき、脂がとけ流れ出ることを知っていたから、この方法をとったであろうと思う。火にかけた石皿の中に入れた肉から油が流れ出て石皿底にたまるのを流しとる方法で最も多量にとることができたであろう。石皿を傾けておけば流れ出た油は大形の貝などに集めることができたであろう。このような用途にあてる目的には片口状の石皿が必要である。箕のような形のものはこのような必要から作られだしたのではあるまいか。動物性脂としてはイノシシ脂がもっともよくとれたであろう。このイノシシ脂は冷えると固まってしまうから火にかけた石皿中に入れてとかし、丹粉の中にあぶらを入れてかきまぜ、ねりあげたものが丹色の油性顔料である。油でねったものは乾くと固まってしまう。このような丹を貯えた土器にはその内面に多量の丹が付着するはずである。土器内面にわざわざ丹をぬったわけではあるまい。土器面に丹彩するときには丹顔料がまだかたまらない中にへらなどで土器面にこすりつけたと考えられる。彼らには貴重な丹であったから丹彩しようとする土器は何でもかまわないというわけではなかったであろう。丹彩された土器をみると土器面が黒色で光沢のあるものが多い。このような黒色の土器は意識的にこのようなものとして作られたと考えなくてはならない。今黒色の素焼火消壺や瓦などを作るときには、素焼がまの中で最後に松まきなど煙の多くでるまきを使ってくすべるものだというが、古代にはこのようなかまの中で焼くことはまだなかった。しかし空気の流通の悪い部分に置かれた土器が黒くいぶることは経験からわかっていたであろうから、黒く仕上げる必要のあるものはそうした配慮のもとに作られたであろう。かくて彼らは黒色土器に丹彩をほどこすことによって、より丹色が美くしくみえることを知っていたと考える。このような丹彩土器は一般日用品として使用された粗雑な製品とは別に特別な用途をもつ容器として用いられたと思われる。恐らく彼らが貴重品と考えるものをいれる容器であったに違いない。丹もまた彼らの貴重品であったから、丹を貯蔵するのもこの丹彩土器であった。

丹を製造することを彼らは知っていたがその原料である沈澱褐鉄鉱を入手することができなかったときには丹を製造することができないから、彼らはでき上った丹を入手したはずである。それらはこのような丹彩土器に入れられて物々交換されたと思われる。蓋として何が使われたかわからぬが蓋がとれて丹がこぼれることを防ぐため、多くは蓋の上を紐で幾重にもからげていた。丹容器であった丹彩土器の肩部に紐通し穴が幾個もめぐらされているのはそのためである。沈澱褐鉄鉱を入手し、これを七〇〇度C前後に熱することによって人工的に丹を得るほか、天然丹を採掘することも多かったはずである。あるいは天然丹を使用する方が多かったかも知れない。天然丹は火山地方にある。神奈川県下では箱根山にあ

る。筆者が確認している天然丹の露頭は箱根町仙石原・高原と、同・小塚と、宮城野・矢落沢と大涌谷とである。まだ各所にあろう。古代には各所に露頭が発見されていて、古代人はそれぞれ自分の発見した露頭を他の者に知られないようにしていたであろう。仙石原長安寺わき（平坂式）・同春山荘分譲地（五領が台式）・宮城野（山形押型文土器）・二の平（茅山式・入海式・五領が台式・勝坂式）などに縄文式土器遺跡のあるのはこの天然丹発見のために来た人達のキャンプのあとと解する。縄文早期から中期初頭にかけて彼らは露頭を求めてやって来た。中期以後丹の需要が増大し、恐らく多数の者がこの地に採取に集まったと思われるのに、中期の遺跡がわずかに二の平にあるばかりなのは、箱根が天然丹の産地として衆知の場所となり、脚力のすぐれた彼らは日帰りで採取に来ることができたであろうから、遺跡として検出できるほどに土器片を残すことはなかったからであろう。仙石原には弥生式土器も三か所から発見されている。彼らも丹を求めて来たものと考える。丹の需要が一層多くなった弥生人の頃には丹採掘の専業者がいて春から秋にかけ、キャンプを作って採掘に従事していたものと解するのである。筆者はハコネとは丹の産地を呼んだ古代名だと解している。

（註）

1、筆者は熔岩の熱が土中に含まれた水酸化第二鉄（沈澱褐鉄鉱）を酸化第二鉄である丹に変ずることによって天然丹が火山に存在すると考えた。そしてこれを採取に来た古代人の遺跡が仙石原周辺の遺跡であると解したので、仙石原を中心として天然丹の露頭を求め歩くこと幾度か。遂に台が岳北裾の石取場で沈澱褐鉄鉱である黄土の厚い層とその中に転落した熔岩塊の表面にできた天然丹を発見、次いで矢落沢（横須賀市博物館研究報告人文科学第六号「横須賀市吉井城山第一貝塚の丹について」（赤星）に火打沢と記したのは誤。矢落沢が正しい。）入口では熔岩流下に天然丹の存在するを認めたが、これは色が充分美くしい丹ではなかった。然るに仙石原小字小塚の銚子の鼻では厚さ一m長さ七mにわたる極めて純度の高い美麗な天然丹層を発見することに成功した。これは春山荘遺跡から三〇〇mという近いものであり、恐らくこの遺跡を残した五領が台式土器使用者が発見したと思われるものであるが、現在の露頭は水面に近いものであり、その後の河流の浸蝕によってあらわれたものと考えるから、当時はこれの続きである、もっと高位置の露頭から採取されたものと考える。この丹は所謂べんがらとしての優良な色であるが、吉井第一貝塚上部貝層の加曽利EII式土器中、黒色へらみがき土器にぬられている丹にくらべると赤味が少ないので、別にこのような赤味の強い、即ち鉄分の多い丹の探索をつづけていた。しかるにその後、横須賀考古学会員田中すき子さんから大涌谷にも丹が存在する旨の報告をうけたので、すぐ現地に急行して調査したところ、噴気孔周辺には各所に沈澱褐鉄鉱をふくむ黄色粘土の層と、それが噴気の熱によって丹に変化したかと思われる美くしい丹色部分をみることができた。この丹色層の中には求めていた赤味の強い丹が存在することを確認することができた。多分早雲山付近でも同じ状態がみられるであろうがこれは確認していない。しかし上強羅付近の石取場に丹が露出しているのはバスの中から認めた。

2、ハコネがハコニとも呼ばれたことは延暦二十一年噴火の富士火山灰により、足柄路が塞がれたので、筥荷路を開いたという古記録によっても知られる。ハ

コニのニは恐らく丹であろう。ハの古代音はパ・ファである。ファとフォは音通で同じである。フォ（ホ）は火である。コ（子）は生れたものをさす言葉である。然らばパコニ・ファコニ（フォコニ―火子丹）は火から生れた丹である。火山にある天然丹がそれである。したがってパコニ（ファコニ）の存在する地がパコニ（ファコニ）と呼ばれるようになり、パコニ→ファコニ→ハコニ→ハコネと変っていったと考えるのである。

（横須賀市博物館・横須賀市立工業高校）

横須賀市博物館研究報告
（人文科学）
第7号　1963年3月

吉井城山貝塚人の持っていた顔料

赤星直忠

横須賀市吉井城山第一貝塚上部貝層は縄文中期加曽利EⅡ式土器を包含している。この土器を残した貝塚人が持っていた顔料には、丹・黒・白があったろうことが遺物から推察できる。丹は所謂丹塗土器とよばれるものにみることができる。丹（酸化第二鉄）は沈澱褐鉄鉱（水酸化第二鉄）を七〇〇度Cくらいに熱することによって得ることができることは縄文早期に既に知られていたらしい。[註1] 天然の丹は火山地方から得られた。[註2] それらの丹に獣脂などをまぜて油性顔料を作ったと考えられる。中期・後期土器片中に度々その内面に黒色のものが一面に固着しており、洗うと黒い水が流れだすことを知っているであろう。煤がたまっているのだときめているようだがあの黒色は土器内に保存されていた黒色顔料の名残だと解されないか。当時もっていたとしたら炭などをすりつぶしたものに獣脂などを混じて作った油性顔料だったと思う。土器中の顔料を全部使ってしまっても尚内面に付着していたものが土器破片になっても残っていたものであろう。吉井城山第一貝塚中間層中から検出された無文淡褐色土器片（関山式か）に径七ミリくらいの黒色珠文六個が二行に描かれているのがある。これは縄文前期に黒色の描文が存在した好資料である。縄文前期に既に黒色顔料を持っていたことが確かである以上、中期・後期の吉井貝塚人が黒色顔料をもっていたであろうことは充分推察できよう。吉井第一貝塚上部貝層出土の加曽利EⅡ式土器片中に二片の白塗土器がある。一片の方は表面がけずれて白色が残存する程度であるが、一片の方は極めて明瞭に残存している。貝層内にあった土器片中には貝片がこびりついて白くなったものがあるが、この断片はどう見ても白色顔料を意識的に塗ったものとみられるものである。彼らが白色顔料をもっていたかどうかは今までわかっていないことのようだが、丹色顔料や黒色顔料をもっていたことの確かな彼らが貝殻（焼いたものを原料にした）をすりつぶしたものを原料として、白色顔料を作ることは容易なことであったはずである。彼らが白色顔料をもっていたことは推察できることである。前述の白色に塗られた土器片はこれを証拠だてるものである。顔料の製法を知っていた彼らが認識することのできた色彩をすべて顔料とすることができたであろうことは推察される。沈澱褐鉄鉱を焼いて丹を作ることを知っていた彼らは丹の原料である沈澱褐鉄鉱の黄土色を充分認識していたはずであるから、これを美くしい色の一つであると意識したとしたら、黄土色顔料も持っていたと考えてよかろう。即ち中期以後の吉井貝塚人は丹・黒・白・黄土の四色は少なくとも顔料として持っていたと考えてよいであろう。